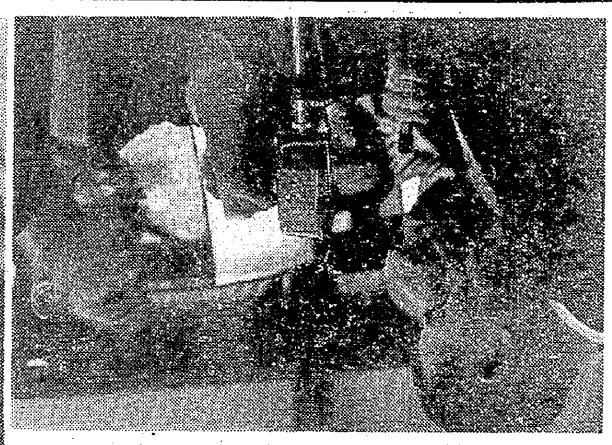
目をつぶってでも歩ける坑内にして

遺族の抗議



ついに爆発した遺族の抗議。写真左は、星下さんの妻・美代子さん。上は、会社幹部に、こぶしをふりあげて抗議する娘さん。それは人間の叫びだつた。

本紙前号で、故星下佐加士さんの災害死について伝えたが、去月十七日三井鉱山は故人のため〝社葬〟を営んで霊を送った。しかし、遺族はもちろんのこと、社葬に結集された組合員や主婦はだまってはいなかった。社葬が終るやいなや、会社を代表してやってきていた滝原・鉱業所次長、加藤・四山鉱長ら会社幹部に対する鋭い抗議の矢が集中。抗議は午後四時過ぎから、夜なかの午後十一時過ぎまで続き、ついに会社幹部をして、「原則として作業を中止する前提で話し合い、緊急に補修整備作業に取り組む」ことなどを約束させたのだった。

星下さんの妻美代子さんの、その夜の、真に人間の叫びにもたとえられる抗議を、今後への教訓として抜すいする。

同じような弔辞を、何べん読めば気がすみますか。弔辞くらい、だれでも読めます。もう、私の涙もかれ果ててしまいました。

ようと、耳の穴をほじくって聞いてください。

あなたたちは、遺族や組合員の前でいっぺん頭をさげさえすれば家に帰ると肩の荷がスーッとおりて、「これですんだ」と、きっとほくそえんでいることでしょう。

聞きますと、あなたたちは、人間がただでも通りにくいような危いところで、人を働かせているといいますが、何ごとですか。「死んだ者の命を返せ」とは、いいやすいことです。でもいくらそう叫んでも、主人の命が返ってくるわけではないのですから、今さら「主人の命を返してくれ」とはもうしません。ただ、こんな恐ろしい仕打ちは、これで最後にしてもらいたい、ということだけです。

おわかりになるはずです。もしも坑内に保安条件の悪いところがあれば、即刻それをなおし、そして働くみんなに石炭を掘らせてこそ、返ってスミもよく出るということが。それに何ですか。世界の三井とさえいわれる企業の一つでありながら、恥かしくもなく働く人間を打ち殺してばかり。

とにかく今させまっていることは、三池労組が主張しているように、坑内のあぶないところは、何はさておき作業を中止してでも環境を改善することです。

思っても見てください。三川鉱大爆発のときなんか、そのために何十日と石炭を出せなかったではないですか。主人の命を奪ったこんどの災害が突きつけている教訓を生かして、この際こそ坑内保安の総点検をやり、初めから保安対策をやりなおしてください。そのためにたとえ三日間休んでも、それで人が働きやすくなるのなら、その三日間の休みくらいはうわまわって、スミは出るはずです。人が死んでからキリキリ舞いをするよりも、前もってやるべきことをやってゆくことこそ、得にもなるはず。

主人の死期が近まったとき、私としましてはひとことでよいから子どもたちの将来のことについての遺言がほしゅうございました。でも主人の遺言はといえば、坑内保安のことばかり。「これ以上死人を出さないように」と、それだけでした。

これからは、したじたの鉱員を職場につける前に、まず自分がそこを通って見てください。

今はただ一つ、目をつぶってもあるける坑内にしてもらうこと。それをここでハッキリと役束してください。そうでないと、あんなにも苦しみ続けながら死んでいった主人が浮ばれません。

人を何百人殺そうとそれが資本家なら刑事問題にもならないことは、いかにゆがんだ世の中とはいえ不思議でなりませんが、こんな人殺しがいちい刑事問題になって見ませんか。鉱長も係員も、何人いても足りないでしょう。

ハッキリと、返事を聞かしてください。

御礼

さきにひき続き、会社の保安無視がひき起こした災害のために、痛ましい死を遂げられた故西村武夫さんのご遺族の西村ツギ子さんからと、故星下佐加士さんのご遺族の星下美代子さんから、CO・遺族闘争のためとして多額のカンパをいただきました。

このご芳志に対し、三池労組は心から感謝の意をささげます。

三池炭鉱労仏組合

今後は若い人々も……

高令者中央集会に参加して

三池退職協　荒尾重満

七三年度高令者中央大集会が東京都立体育館で、九月十五日に行なわれ、三池（退職者同盟）より私と伊地知さんの二人が出席させていただきました。

人の熱気で一ぱいの会場で開会され、まず主催者を代表して、かっての闘志の加藤勘十氏の力強いあいさつのあと、市川総評議長の「運動をふり返って」「今年度の情勢の特徴と問題」等の基調報告が続き、この日満六十一才の誕生日を迎えられた社会党の成田知巳委員長のあいさつもありました。委員長はあいさつの中で、「みなさんの仲間入りをして二回目の集会だが、このような集会が必要でなくなる世の中を、一日も早くつくらねばならない。社会保障拡充の主張は、政府へのお願いでなく当然の権利として闘いたい」、と訴えられました。

続いて共産党の春日国会議員団団長のあいさつ。ついで今年度より新しくこの集会に参加することになった公明党の浅井副委員長のあいさつ等がありました。民社党には出席をお願いしていたらしいのですが、最後まで姿を見せませんでした。美濃部都知事も仕事の都合で遅れるとのことでした。

その後「今日のこの集会の皆様に訴える」として、福島県、東京都、富山県、岡山県、福岡県の各代表が活動状況を報告、年金改善運動への力強い決意を述べました。

その時美濃部都知事が現れ「私はこの壇上より話をするよりも、みんなと一緒に下で聞く年なんですが…」と、ユーモラスな中にも施政の一端を述べられました。最後にアピールを採択、閉会したのでした。その後デモ。

以上で大集会は終りましたが、これからはもっと若い人達も集まれる集会にしてほしいな、と思ったものです。

強める反基地闘争

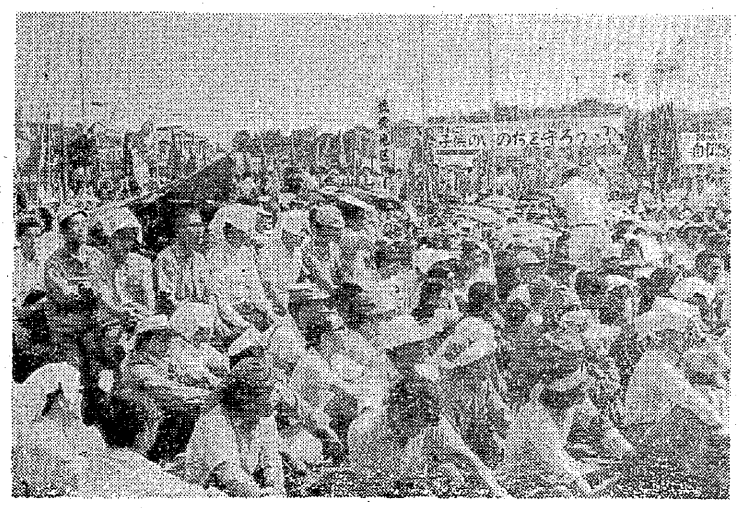
岡垣射爆場反対集会で決議

去月十六日、遠賀郡岡垣町の市民館前広場で、〝岡垣射爆場撤去県民抗議大集会〟が行なわれ、そして岡垣射爆場ばかりでなく、県下のすべての基地が撤去されるまで闘うことを、誓った。

集会は、社会党、共産党、公明党に福岡県評、遠賀・宗像両地区労、岡垣町〝射爆場撤去をすすめる会〟の共催で、約一万人が参加した。（三池労組からは、ニュースカー〝はたかぜ〟で十人参加）

航空自衛隊は県民の強い反対を押し切り、八月二十七日から同射爆場での射撃訓練を開始したが、ここはわが国でたった二つある射爆場の一つで、四次防の一環として再開されたもので、やがてはわが国の航空自衛隊ばかりでなく、在日米空軍の射撃練習もここに集中することが不安がられている。

九月七日の〝長沼裁判〟で、自衛隊は憲法に違反しているとの判決が出たばかりであるが、その判決こそが同射爆場の再開に反対する闘いの正しさを、あますところもなく示したものといえ、今後はいっそう反対闘争を強めなければならない。



岡垣射爆場反対集会

私の書棚

歌集〝鉄帽〟を読んで

高椋竜生

このたび三池の歌人・木村守著歌集〝鉄帽〟を落手した。

著者は私と同じ丸刈りで通した小柄な体躯で、いつも目立たず、縁の下の力持ちのような生き方をする人のようであった。

立ちながら弁当食えるかたわらに放尿をする採炭工もありなんのてらいもなく、さらっとありのままに詠い上げているところに、この歌人の人柄がしたしくうかがえる。

一心に蝶追いかくる子の姿と畑を隔てて動めにいずる

三人の子等養まるといい出せば炊事している妻忙しがる

母と妻のどちらかが置き忘れしか番台にある傘はわが物

誕生日の希望子に聞く優しさが妻にありたり温くおり

どの歌にも、この人のほのぼのとした人間味がただよっている。この人間味、温い心が、人間らしく生きようとささえ合う家族の心が、三本線をつらぬき、三池の闘いをささえ、差別とのはげしい闘いをつづけてきたのである。

弱ったるそこにわけ入り職倒が情をかくる素振りに寄り来

卒倒に近き切羽の暑気あたり一人また一人資本に降る

陥ちゆくも踏みとどまるもつづまりは女房の力に咲つもの多き

三池労組の今日あるは、まさにこの女房あったればこそである。

とくに炭じん爆発の歌はもっとも秀れ、まさに鬼気迫る思いがする。

逆巻きし土砂の流れに巻かれつつ手足ちぎれてしまえる遺体

爛れたる皮膚はめくれて赤肉の形相凄く洗わるる顔

助からむともがきまわりし指の皮膚破れ裂け白く骨いでていき引きだせばかぎりない歌のかずかずである。

若きより固持し続けし一つなる丸刈り頭子のいぶかれる

私も、作者と同じ生涯の丸刈り頭で、なんとなしにこの人の歌までが、すんなりと私の五体に溶けこんでくる。

雨降りて休みとなれば家に居る妻を重石のように思える

この妻ありて、この人ありてこの歌集あり。この歌集は、作者の人生と家族と三池のなかまの歴史が、虚色なく、清く、はげしく、美しく詠いあげられている。

短歌新聞社発行。千円。著者は荒尾市万田社宅万町二棟。